

受難節第五礼拝

＜卒業入学祝福＞

2023年3月26日（日）

題 「十字架を担うイエス」

テキスト：ルカによる福音書23章26～43節

皆さん、おはようございます。

今日の聖書の箇所はいよいよイエスが十字架につけられる苦難の道の場面で昔からラテン語でヴィア・ドロローサと言われます。主イエスが十字架を背負って歩まれた道です。今でも巡礼の道となっています。

一緒に聖書の言葉に聞きましょう。

◆十字架につけられる

26:人々はイエスを引いて行く途中、田舎から出て来たシモンというキレネ人を捕まえて、十字架を背負わせ、イエスの後ろから運ばせた。

権力者に捕えられたイエスは、嘲られ罵られ、鞭打たれ、平手でうたれ、茨の冠をかぶせられたりして、体力的に十字架を担うことが出来ない状態でした。当時十字架刑につけられる者は、自分で十字架を、十字架の横木をかついでいかなければならなかったようです。十字架の縦の木は処刑場に取り付けられていたと言われています。

この時、田舎から出て来たシモンという人が、イエスの十字架を担ぐこととなりました。わたしは、今回聖書を読んで、この時イエスの十字架を担がされたシモンという人の気持ちと、その後の人生を思わされました。一説にはシモンはアフリカの北部地域からエルサレムに移住していた人で、後にキリスト教会の一員となったという伝説もあります。

「27:民衆と嘆き悲しむ婦人たちが大きな群れを成して、イエスに従った。」この時、悲しんでイエスについていく人たちも多くいたようです。特に名もない婦人たちが多かったようです。ちなみにその後イエスの名が世界に広がって行った時には、女性たちの働きが大きかったとある学者は説明しています。その女性たちに、イエスは語りかけました。

「28:イエスは婦人たちの方を振り向いて言われた。「エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣け。」

少し分かりにくいですが、これは紀元70年にローマ軍によるエルサレムの攻撃、エルサレムの街の陥落を預言しているようです。イエスが十字架につかれた40年後に実際に起こったことです。自分と子供たちのために泣け、イエ

スの受けた十字架の苦しみを自分のこととして受け取れるだろうか、と思わされます。

29:人々が、『子を産めない女、産んだことのない胎、乳を飲ませたことのない乳房は幸いだ』と言う日が来る。

30:そのとき、人々は山に向かつては、／『我々の上に崩れ落ちてくれ』と言ひ、／丘に向かつては、／『我々を覆ってくれ』と言ひ始める。

31:『生の木』さえこうされるのなら、『枯れた木』はいったいどうなるのだろうか。」

女性たちの受ける苦難の姿が旧約聖書の言葉で説明されています。

29節のことばは、マタイ 24:19、にもマルコ 13:17 にもあります。

30節のことばは、ホセア書 10:8 節のことばです。ここでは、崩れ落ちる山や、覆いかぶさる丘と用いて、絶望して自らの死を願う者たちの姿のように思えます。ここには厳しい状況の中で混乱し絶望する人々の姿があります。

いたずらに不安を煽るのではなく、世界では現代でも自然災害や戦争は現実起こっていますし、無実な人の冤罪事件もあります。何より人間の命の尊厳さと平和の大切さを思わされます。それに対して、わたしたちはどれほど、真剣に備えているのでしょうか。どこか自分の身には起こらないかのように思っている自分もいます。「備えよ！」との言葉が響くようです。

さて、

処刑場所につくとそこには3本の十字架が建てられていました。

32:ほかに、二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。

33:「されこうべ」と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に、十字架につけた。

「されこうべ」とは、ガイコツという意味で、地形がガイコツに似ていたのだと思います。エルサレムの町の郊外にあった場所です。この場所は「ゴルゴタ」という名前で歴史に刻まれています。

ちなみに洲本礼拝堂の正面を見ると、十字架は一つですが、講壇の電球を点けると陰になった十字架が二つ見えると思います。3本の十字架です。照明の電球を変えた時、そのように変えてみました。今日の聖書の個所から思いを与えられたのです。

イエスの両脇には二人の犯罪人がいたのです。わたしたちは、十字架に向き合った時、どこを見て、何を思うのでしょうか？ それは一人一人異なっていると思います。

4つの福音書（マルコ、マタイ、ルカ、ヨハネ）全体では、イエスは、十字架の上で7つの言葉を語られました。今日の個所のことばは最初の一つです。

「34: [そのとき、イエスは言われた。『父よ、彼らをお赦しください。

自分が何をしているのか知らないのです。』] 人々はくじを引いて、

イエスの服を分け合った。」とあります。実はこの言葉は、聖書の原本である写本には、書いてあるものと、かいてないものもあるようです。

ルカによる福音書によれば、

イエスは、自分の死の時に、十字架につける者、観ている者たちへの赦しを神に祈られたのです。

十字架を見ていた人々の姿が記されています。

35:民衆は立って見つめていた。議員たちも、あざ笑って言った。「他

人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を

救うがよい。」36:兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して、ユダヤ人の民衆、政治家たち、また「兵士たち」もいました。十字架け刑は、当時ユダヤを支配していたローマ帝国権限で行われる処刑です。十字架のそばにはローマ兵がいたのです。

そして、

「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」という人たちもいたのです。

「38:イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札も掲げてあった。」と言われます。

そして、イエスと共に十字架につけられた二人の囚人の言葉が記されています。

39:十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。

「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」

一人はイエスをののしりながら助けを要求しています。

このイエスに対するののしりは、この人だけかと思うのです。人は自分が人生で受けたさまざまな苦しみ。それは人によって異なっていると思います。言葉にできない苦しみもあります。

人はそれを十字架のイエスにぶつけるのです。「どうして、なぜ、わたしや、私の家族だけが苦しむのか」など。十字架のイエスはただ、人間のあびせかける声、ことばを受けたのです。イエスは、人の子、神の子として、人間の苦しみ、罵声を浴びせる人間の心を受けとめられたのです。それがイエスの十字架の赦しであったのではないだろうか、と思わされます。

34: [そのとき、イエスは言われた。『父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。』]

そして、もう一人の十字架につけられていた人。

40:すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、

同じ刑罰を受けているのに。41:我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」

もう一人は、自身十字架につけられた身である中、イエスをののしる者をいましめています。そしてイエスに救いを求めました。この二人の血違いはどこから生まれるのでしょうか。人間はいざとなると、自分のことしか見えなくなるようです。しかし、この人はイエスを見たのです。イエスの正しさを見たのです。ここに違いがあります。そして「イエスよ、あなたの御国においでになるときは、わたしを思い出してください」と願います。心を打つ言葉です。

43:するとイエスは、「**はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる**」と言われた。

「はっきり言うておくが、」ということばの「はっきり」ということばには、新約聖書の原語のギリシア語で「アーメン」ということばで、神の子イエスの確信的な言葉が使用されています。つまり、「あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」との約束・保証の言葉なのです。

イエスは十字架にけられるような罪は犯されませんでした。

しかし、罪人の受ける十字架につけられたのです。罪人、犯罪人としての死を向えられたのです。

これは神の子イエスが十字架につき、人間の根本的な罪、纏わりつく罪を担われたということをも表しているのです。「罪を贖う」といわれますが、「贖い」には、「担う、解放する、自由にする」との意味もあります。イエスは十字架に死に、わたしたちを死から命へと救ってくださったのです。

イザヤ書 53 章 (p1150) 1 2 節に示された「苦難の僕」の姿が実現したのです。

1 2 節後半には「多くの人の過ちを担い 背いた者のために執り成しをしたのは この人であった。」。

ここに示された苦難のしもべの姿は、イエスの姿だと伝えられています。

受難節のこの時、イエスの十字架に至る道には、人間の罪への裁きと共に、イエスの罪を贖う、罪を担うことによって贖う。罪からの自由、解放への道が示されていることをわたしたちは自分自身に関係のあることとして覚えて起きたいと思わされます。

皆様の上に主の平安を祈ります。共に黙想しましょう。